

一般教育部、そして全カリ ～移りゆく教養教育の先を考える～

日 時：2013年10月1日(火) 16時30分～18時30分

場 所：立教大学池袋キャンパス 12号館2階 旧総長執務室

◆コーディネーター：

西原 廉太 本学文学部教授 副総長

◆参加者：

月本 昭男 本学文学部教授
千石 英世 本学文学部教授 立教セカンドステージ大学副学長
青木 康 本学文学部教授
全学共通カリキュラム運営センター部長

○西原 本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。今回の企画ですけれども、“一般教育部、そして全カリ”というテーマがついております。～移りゆく教養教育の先を考える～という副題をつけていますが、趣旨を読み上げますと、「一般教育部と全カリを対比的に取り上げ、全カリ第2ステージでのカリキュラム

改編を振り返りつつ、2016年スタートを予定している学士課程統合カリキュラムについて考える」というものです。

それでは一般教育部の頃より本学での教

育・研究にご尽力いただいている月本先生、文学部教授で、いまはセカンドステージ大学の副学長もつとめられている千石先生、そして現在、全カリ部長で、一般教育部から全カリに移行する際の全カリ改革の際、改革の中心におられた青木先生に来ていただき、様々な立場からお話していただいて、これからの立教大学の様々な教育改革につなげさせていただきたいと思いません。

〈一般教育で学ぶ「キリスト教倫理」〉

○西原 まずは月本先生から。ご着任はいつ頃ですか。

○月本 私は1981年に一般教育部に着任いたしました。担当は、一般教育課程におかれていた「キリスト教倫理」という科目でした。当時は通年科目で、それを3科目、他には文学部の授業や、一般教育部の演習を担当しました。一般教育部の演習は、学部の演習



西原 廉太

科目とは別に、それぞれの先生の専門分野のテーマが掲げられ、専門の勉強に必ずしも関心を持ってないでいた学生たちも少なからず参加していました。私などは「ヨブ記を読む」といったテーマを掲げたこともありました。というわけで、1995年に一般教育部解体に伴い、文学部に移籍するまで、私は一般教育部所属で、主に「キリスト教倫理」を担当していました。しかし、当初、私はこの科目名には違和感を持っておりました。

○西原 通称「キリ倫」と呼ばれていましたが。

○月本 そうです。学生の間では「キリ倫」とね。

○西原 先生の頃はもう必修じゃなかったのですよね。

○月本 ええ、必修じゃありませんでした。大学闘争、大学紛争の時代までは、小さなクラス単位の必修科目でしたが、大学闘争後に選択必修に変更されました。しかし、その後も、かなりの数の科目が開講されていましたね。担任教員により大きいクラスや小さいクラスと様々でしたけれど、通年一コマを二コマと換算すれば、現在の全カリのキリスト教関連科目より多かったと思います。当時より学生数が5割ほど増えたことを考慮しますと、比率はさらに高かったはずです。

このような「キリスト教倫理」を必修科目としておいた背景には、当初、立教で学ぶ学生にはキリスト教的倫理観を身につけて欲しい、という大学側の願いがあったのだと思います。私の前任者は総長をつとめられた大須賀潔先生でしたが、大須賀先生などは文字通りキリスト教倫理を教えておられたかと思います。しかし、私が赴任したころは、すでに、狭義のキリスト教倫理ではなく、それぞれの先生の専門を生かしながら、多方面からキリス

ト教を学べる講義がなされてきました。先生がたのなかには、日本のキリスト教史を専門とする方もいらっしゃれば、古代キリスト教思想の研究者もいらっしゃいました。私の専



月本 昭男

門は聖書学ですから、「キリスト教倫理」と言っても講義は聖書の思想が中心でした。そこで、なぜその科目を「キリスト教倫理」と呼ばなければならないのか、授業内容と科目名との不整合を感じたのですね。

しかし、その後、「キリスト教倫理」を長く担当しておられた菊地栄三先生が、一般教育におけるキリスト教倫理科目がどういう趣旨、どういう理念で、大学闘争・紛争後も継続して開講されたのか、ということをお書きくださった。それを読ませていただき、私はこの科目名にある程度は納得したことでした。

それは、こういうことでした。つまり、キリスト教的生き方や倫理観を学生に教え込むというよりも、立教で学ぶ学生たちには、学生時代にそれぞれの人生観や倫理観の基礎づくりをして、巣立って行ってほしい。そのための素材として、また問題提起として、立教大学らしく、学問というフィルターを通したキリスト教思想を多面的に提示してあげる。「キリスト教倫理」という科目はそういう趣旨で設置されている、と菊地先生はお書きくださっ

た。つまり、立教らしさを示す全学的な科目である、ということですね。

一般教育科目は、その後、全学共通カリキュラムに変更され、「キリスト教倫理」という名の科目はなくなりましたが、キリスト教関連科目はそういう趣旨で続けられていくでしょうし、また、そういう科目が数多く開講されているのが、立教大学としては望ましいと思いますね。ちなみに、数あるキリスト教大学のなかで、キリスト教科目を必修にしていないのは本学と同志社大学だけです。

〈大学における一般教育とは〉

○西原 一般教育部自体の理念で共通するものはありましたか。

○月本 いや、それはなかったと思いますね。むしろ私は現実の一般教育自体に矛盾を感じていました。そもそも一般教育というものは、戦後の大学教育の中で矛盾を抱えながら出発していると思います。青木先生のほうが私より、よくご存知だと思いますが、戦前の大学では一般教育はなかった。語学もなかった。大学はもっぱら専門教育の場でした。教養科目はそれまでの旧



青木 康

制高校の時代に終わっていたわけですね。しかし、戦後の教育改革において、これまでの大学は専門教育だけを行っていて、広い世界的視野をもつとか、あるいは異

なる文化を理解するとか、そういうことがなされてこなかったが、それでよかったのか、という反省がなされたのですね。教養を欠いた専門性が軍国主義になだれ込む結果につながったのではないか。そういう反省がありましたね。

もう一方で、戦勝国アメリカの教育制度を導入する、という意図もどこかにはたらいたのかもしれませんが。それまでの日本の大学教育はドイツ的なものでしたからね。教員は教えることよりも研究することが主で、学生は教授の後ろ姿を見て学べ、という時代だったと思います。戦後、そのような教育への反省がなされ、大学生にもバランスが取れた教養を身に付けさせよう、ということになりました。

その趣旨は良かったと思いますけれど、実際には、旧制高校の先生などが一般教育を担うようになり、一般教育と専門教育との間に格差が生まれました。一般教育は専門教育の準備段階として位置づけられました。先生がたのなかにも、一般教育学部所属よりも専門学部所属のほうが格上である、といった意識がありましたね。そういうことが、戦後の大学教育のなかで、一般教育がうまく機能しなかった理由のひとつでしょうか。それは一般教育の空洞化などとも呼ばれていました。本来ならば、大学の教養科目は、その道の大家とよばれるような、経験豊富な学者が教えるべきなのですね。

そこで、大学設置基準の大綱化が文部科学省から提示された。そこでは、一般教育は推奨されているのでしょうか。

○青木 一般的には、教養をつけるってこと自体はむしろ重視するって言っているんですよ。ただし、従来のように教養科目というものを設けて、「教養科目としてこれだけのもの

をとりなさい」という指定の仕方はしませんよ、と言っている。つまり、今度は受け止める大学側が、教養というものをどういう風にすれば学生が身につけられるか、あるいは学んでいけるか、主体的に考えないといけません。大綱化以降は、卒業するまでには例えば120何単位とあるけれども、従来のようにそのうちの何分の一かはいわゆる専門でないものにしなさいというふうには文科省が枠を作っていないわけだから。しかし文科省はやらなくていいとはいっていない。教養ある人間を作りなさいというのは当然なんだけれども、それを従来のようなかたちで外枠から指定はしない。だから受け止める側がどれだけ熱心に、どれだけ良く考えて用意するかという問題なのだと思います。

〈「訳読」で学ぶ時代〉

○西原 千石先生はいつ赴任されたのですか。

○千石 1992年に赴任しました。私は当時英米文学科の所属でしたけど、全部で何コマか持っているうちの一部はいわゆる一般教育の英語科目でした。



千石 英世

法学部や社会学部の学生相手に何年間かやりましたね。それから一般教育部が全カリへ変わるとき、青木先生なんかが夜遅くまで活躍されているのを私は遠くから応援

しておりました（笑）。決して傍観していたわけではありません。念力を送っていました（笑）。

○西原 では先生もまさに一般教育部から全カリにうつるなかで、立教の教養教育にも深く関わられていたわけですね。いま青木先生から、教養というものをどうすれば学生に伝えられるか、身につけさせられるかというお話がありましたけれども、先生は今までそういったご経験からは何かお考えはありますか。教養とは何かという問題もあるんですけども。

○千石 私が一般教育の英語をやっていた頃は…まあ今もそうでしょうけれど…大学の英語教育について色々論争がありました。いわゆる実用的な英語なのか、しっかり文献が読めるような教育なのか。

私は教室に行って30人～50人くらいの学生に、「一年間僕と一緒に勉強したら英語が喋れるようになるよ」と言ったことはありません（笑）。そうではなくて、私だけではありませんが、テキストを選んでしっかり予習して、指されたらちゃんと文法的な説明が出来たり、あるいは語句の説明が出来たり、内容にわたって説明が出来て、中身の解釈ができるというか、あるいは、そういうことができるようなテキストを選ぶということですかね。まあそういう英語教師を、一般教育の学生相手にはしていました。

一方で実用英語派のほうが論争を仕掛けてくるわけですけども。もちろん実用英語派の論陣の方には正当性も説得力もあるし、その通りだとも思うんですが、私の実践にもまあ正当性はあるだろうと思っていましたし、今も思っています。いまは全カリの英語がどうなっているかきちんとわかってはいませんが、選ばれたテキストを、辞書を引きながら、一語一語大事に扱っ

て、それで全体の英語が表している世界観なり何なりをいわゆる「訳読」というかたちで学ぶ。これはいまでも重要だと思っています。重要どころか、これがないと人文学の基礎は成り立たないと思っています。この基礎作業は永遠だと思えますね、文系の学部にとっては。だから実用英語は、そっちはそっちで一生懸命やってもらわないと困るのですが、それを大切にすあまり、今言ったものがおろそかになるというのは考え物だなと思います。

○西原 その辺はとても大事なポイントかと思っています。そもそも建学の頃を考えても、1874年にウィリアムズがつくった立教学校では、英語の聖書を使って英語で聖書を読むと、まさに聖書の世界観を、英語を通して訳読させていたわけですね。ある種それがリベラルアーツの原点、根幹の教育だったのではなかったかなと。

○千石 それは英語でなくちゃいけないということではないですよ。つまり母国語以外のテキストに何が書いてあるか。それを手探りで探ること…江戸時代以前は漢文を相手にやったし、異国ではギリシャ語やラテン語を相手にやった。そういう母国語以外のものに何が書いてあるかを探り当てるのはなかなか面白い。それだけではなく、探る側…学生側の思考回路をつくることになる私は信じています。いまさら多勢に無勢ですが（笑）。

〈全カリ移行後の言語教育〉

○西原 一般教育部から全カリに移行した時のポイントや理念について青木先生からコメントいただけますでしょうか。

○青木 正直言って言語教育のところはそう…私が何かいうところじゃないですけど、いま千石先生が仰ったと

ころはとても大切だと思いました。つまり、かつての一般教育部というよりも日本の大学の大綱化以前の時代、いわゆる一般教育があって、三系列の一般教育科目と、外国語と、保健体育があって、それだけは専門から切り離して、そういう時間帯を設けて一定の単位をとらせるようにしていた。そのようなかたちで外国語も置いていた。そういうなかで、実態として多くの大学で訳読のようなタイプの授業が多くあって、まあプラクティカルな部分も本当は必要だったんだろうけれど、どちらかというと訳読型のほうが広がっていたのは事実です。それに非常に意味があったのは事実なんだけれども、教養教育と専門教育というように分けて考えちゃって、あえていえば外国語は制度上やらなくちゃいけないから、という考えの中でやっていた。

訳読は、先生方が持っている専門的な特性によって多様な展開がありえました。自分自身の経験で言うと、私は大学時代英語の授業はやはり訳読中心だったんだけど、一人の先生は文化人類学がお得意で、やや一般向けに書かれた文化人類学の本を頭をひねりながら読みました。それはすごく勉強になりました。それからもう一人は19世紀のイギリス小説の専門家で、それはそれでやりました。だから私自身の勉強の過程としていえば、どちらも関心があり、のちにイギリスの歴史をやることになったのでイギリスの小説もギーギー言いながら細かく読まされたことは非常に勉強になりましたし、その一方で文化人類学は、歴史とは違うけれども非常に関係の深い学問で、そういうものを英語の授業の中で読めたということは大変良かったと思います。

ただ90年代に一般教育から全カリという新しい課程になった時に、言語教

育については、よりプラクティカルな方へ重点を移行させたと思います。なぜそういうことをしなければならなかったのかということ、文献をそういう風にじっくり読むというよりは、受信にしろ発信にしろ、人とまずはコミュニケーションする、その媒体が英語であれば、そのために英語を学ぶ。初習と呼んでいる第二外国語の場合は、そもそもの入り口のところで学びで、そういう路線の差が出る以前のところなので違いが出にくいかもしれないけれど、英語に関してははっきり、かつての一般教育と今の全カリとで何を教えるかについてはだいぶ差が出たと思います。

一般教育の中でいい勉強をした事例は多くありますが、今言ったような訳読でやっていくことになる、色々な学部がある中で、訳読はコンテンツに関わっていくことになるので、カリキュラムとして一律に考えることが難しい。あえて教養教育と専門教育を分けるとすれば、専門教育のなかでもその専門性を深めるための外国語は必要です。実際われわれも、それぞれの専門に行くとき外国語文献講読であるとか、学部専門の語学とかやるわけですよ。一般教育として考えた時、従来のやり方は非常にプログラム化しにくかったんです。

特に立教大学は学部別の教養教育になっていなくて、今の全カリもそうですけど、当時の一般教育部も全学に対して責任を持って一定のプログラムを提供していました。そのコンテンツが先生によって違っている。例えば最初にうちの英語教育の教養レベルが終わった時、どういうことを学ぶか、どこまで行っているのか。他大学では、それをスタンダードと言ったりしていますが。

○西原 到達目標。



○青木 そういうもののコントロールが非常に難しい。

○千石 一般教育部時代はクラスサイズも大きかったですしね。40人とか70人とか。

90年代はどこの大学も同じで、学生数がどんどん増えてきていました。それ以前は、資源も、制度もなくクラスサイズを小さくすることができませんでした。日本の大学が大学らしくなってきたのはここ20~30年のことですか。

○月本 立教に限って言えば、それはいい選択だったとは言えないように思えます。

現在、英会話をはじめとする外国語学校がたくさんできています。外国語の運用能力を身につけさせるのであれば、そうした学校に任せたほうがよい。大学での言語教育は、ちょっとした会話能力を身につけさせるよりも、言語を通して文化の内実に踏み込む、つまり、教養として言語教育が必要なのではありませんか。とくに古典がないがしろにされつつありますね。英米文学専修でもシェイクスピアや聖書を読む授業がなくなっていると聞きますが。

○千石 なくなったわけではないです。縮小しているだけです。

〈リベラルアーツ教育〉

○**月本** じつは、学部教育全体がリベラルアーツ教育になっていますね。例えば立教の法学部ではリーガルマインドを育てる、ということがいわれました。経済学部の親しい教員からは、経済学部の学生は日経新聞が読めるくらいになってくれればよい、とも聞きました。これらは、専門教育ではなく、リベラルアーツ教育にほかなりませんね。

以前、アメリカのアマースト大学を見学する機会がありました。ここは大学院を持たない、典型的なリベラルアーツ大学で、学生数も全体で1,600人くらいです。自然科学や日本学なども専攻でき、卒業生の8割がハーバードやイェール、プリンストン大学へ進学していると聞きました。立教大学では、全カリでリベラルアーツ教育を担うと理解されていますが、専門教育も含めて学部教育全体がじつはリベラルアーツ教育を行っている。そういう認識が必要ではないでしょうか。

○**西原** それが2016年度からの学士課程統合カリキュラムです。学部全体がリベラルアーツ教育を担うということです。

○**千石** その提案には全面的に賛成です。実は私もアマースト大学に行ったことがあります。比較してはダメだけれど、アマーストは、授業でも学生の提出物は毎回添削される。北米でも指折の大学です。学生たちがキャンパスを歩いているロバート・フロスト先生に話しかけられる環境があるんです。フロストは詩人です。アマーストの学生は顔つきから歩き方まで違う。アメリカの貴族階級の大学なんですな。一方、隣接するユーマスは巨大大学です。

○**西原** ウィリアムズ主教の出身大学

も学士課程しかない大学ですよ。学生がしのぎを削っている。サウス大学もそう。ウィリアム・アンド・メアリー大学、バージニア神学校（ウィリアムズ主教が卒業した大学、神学校）などと原点は同じ。立教も昔は全寮制でチュートリアル教育をしていましたね。

○**千石** 日本の高等教育は揺れながら現在の形にたどり着いて、これからまた規模を小さくすることなど考えられない現状で、そういう条件の中で統合カリはいい線いっていると思いますよ。

アングロサクソンの大学は基本的に全寮制ですよ。そのメリットとは、親から離れられることなんですよ。そうすると親の価値観ではない世界が見えてくる。これが重要です。日本の高等教育では現在自宅から通う学生が多いですよ。何がいけないかというと、親の価値観から独立できないんです。また、昨今はメディアの教育力がすごいです。大学は、親の価値観やメディアの教育力といったものに負けているんですね。そう考えると、引きこもりが最も恵まれた教育環境ということになってしまいうんですが、家でパソコンの前にいれば知識が入ってきます。でも、それは学問ではないんです。学問とは、志を同じくする人が集まり、ともに考えるもの。ともに考える人たちの間で会話が弾んでこそ学問だといえます。となると、いま、日本の高等教育がおかれている環境はピンチなんですね。

そういった意味では、今、新しくなった池袋図書館が学生が集まる場所を提供し、そこで学生がたむろするのは何といってもめでたいことなんです。アマースト大学のように教師が校庭をぶらぶらしている、先輩が集まっているという構図がほしい。

私が関係している立教セカンドステージ大学は、平均年齢62.7歳の学生たちがみな、非常に学校が楽しいと言っています。カルチャーの教養はカルチャーセンターで身につけることができますが、これは学問ではありません。志が同じ人が集まることがどれほど楽しく、啓発されることか。保護された場所、保護された時間帯を提供することが必要なですね。立教には我が国の高等教育の歴史をふまえた、第3の道を探ることが必要です。

○西原 2012年度の総合改革では、学部提供のテキストを読むことを基盤とする領域別B科目を新たに取り入れるなど意味がありましたよね。

○青木 領域別科目というのは、もともとは、専門科目に全カリ科目を併置して、全カリ科目として学生に履修させるという案だったんですが、学部と折り合いがつかず、今のような形になりました。2016年カリではもっと専門科目と全カリをリンクさせて提供していくことが考えられています。

〈教育の第3の道とは〉

○青木 本来は大学教育ではいろんなことが行われなくなるといけないのですが、以前は教員個々の力に頼って行っていたんですね。昔それを「名人芸」とよく言っていました。もっといえば「思いつき」。だから教育が標準化されていない。教員の思いつきに終わる。「これをやったからここまで到達した」というようなことがないまま終わってしまっていて、体系化ができていなかったんです。

○千石 思いつきならいいけれど、思い込みのときもありますよね。

○青木 一般教育部が全カリに変わったとき、教養教育をめぐる、教える側が実感していた上で述べたような問題

点を解決したいという気持ちがありました。そのなかで、テキストをきちんと読み込むような授業がどうやってカリキュラムとして担保できるか？

○千石 確にかつての教養教育が体系化されていなかったのは本当ですね。でも20年～30年前はそれでもよかったんです。40年前は15%の進学率でしたから。それが今は50%を超えている。それも全国で50%ですから、首都圏に絞ればきつと70%を超えてくるでしょう。そうなると、入学してくる学生のモチベーションがみんな違う。こういった学生には名人芸は通用しないので、提供するメニューをはっきりさせないとダメでなんですね。

○青木 全カリになってやった工夫は、必修のあとに継続して学ぶ自由科目を豊富にしたことと、その取得単位が学部の自由科目の単位になりうるようにしたことです。個人が考えて学びを組み立てることができるようになりました。しかしながら、難しいものは読めない。専門のなかでやるのも大事ですが、違う視点のものに取り組むことも大事です。

○月本 総じて、学部というシステムの形骸化が起きていると思います。たとえば文科系の学部の場合、どの学部で学んでも、就職先はほとんど変わりませんね。卒業生は特に専門性を生かす就職先に勤めるわけではありませんし、また企業自体が必ずしも法律や経済などの専門知識を要求しているわけではありませんね。専門教育の意味について、そろそろ再考する時期に来ているのではないのでしょうか。

○千石 少子化の今こそ、これからの教育について考えるチャンスです。今の教育は学生が増える前提で決められていますが、これからは減っていきます。何らかの手を打たないといけません。消極的ではなく、積極的に手

を打ちたい。今、学部ごとの入試、卒業式をやっていますが、学部ごとの教育に意味はあるのでしょうか。ICUはあの規模だから今も少人数教育ができています。立教はあるとき、その道を捨てたんですね。戻ろうと思ってももう戻れない。日本の高等教育の運命を引き受けたということなんです。今、ICUのようにできるのは、第2のICUといわれている秋田の国際教養大学くらいです。少人数教育にはいくつかの条件が必要なんです。

○**月本** かつて、都市型中規模大学が立教の特色である、と盛んにいわれました。しかし、いつの間にかこうした特色づけはしなくなりました。理念の検証もせぬまま、立教の特色が変わってしまった、という感じです。これまでの理念の検証とともに、将来に向けて本学がどのような理念を掲げるのか、しっかりとした議論が必要だと思います。

○**西原** 立教は学生が2万人、受験者が7万人を超えたと言いますが、規模が大きくなったことだけが自慢ではないですよ。確かに検証が必要です。ある程度の規模をもちつつ、きちんと読み考える力をつけるという第3の道を構想することは大切です。

○**千石** これまでは学生が増える一方でしたが、大学生人口も減り、日本の大学もどんどん減っていきます。人口減を前提としたプランを出していかなければならないと思います。立教のメリットは理念を真っ先に出せることです。

○**月本** 着任当初、立教らしさとして感じたことのひとつは「文化の香り」でした。それが最近では薄れつつあるように思います。就職のためにスキルを身に付ける、ということばかりが強調されているように感じます。その時々々の社会に有用な人材を送り出すの

ではなく、社会に対する批判的なまなざしを養う教育こそが大学の重要な役割ではないでしょうか。

1950年代の東大で起こったポポロ事件の際、矢内原忠雄総長が国会に喚問され、国民の血税を使って反社会的な人材をつくるとは何事か、と批判されました。その時に矢内原は大学に権威があり、自由と自治が認められてきたのは、真理を探究する機関であるからであって、その時々々の社会に有用な学生を育てることが大学の使命ではない、と主張したと伝えられます。彼自身、1937年、時局を批判して、東大を辞職させられるという体験をしています。

○**青木** 一方で、大学は「同業他社」との競争があるのも事実です。有用な人を社会に対して供給することも必要です。コミュニティ福祉学部が1998年にできたのも、高齢化社会に福祉人材を輩出するという考え方からで、新規の定員枠が認められたんですね。しかし、立教らしいところは、単純な福祉学部にしなかったこと、月本先生もご存知のようにキリスト教の考えを入れたことです。だから名前も「コミュニティ福祉」となっています。また、観光学部にしても、創立後数年にして交流文化学科を設立するなど、理念性がありました。それは立教全体の精神で、それに基づいて動いていると思います。

○**西原** 文部科学省、中教審の答申、並立大学の調査結果がどうしても気になるものです。そのなかで、明治や早稲田に伍するにはいい人材を輩出することが必要だ、と謳われ、何か商品をつくるように麻痺していってしまう。常に立ち返る回路が必要ですね。

○**千石** いやいや、どんどん負け続けて立教の特色を出す、というのもしないかもしれませんよ。総長室がいろいろ

考えていることは大事だと思いますが。

○西原 なるほど「負け続ける」ですか。確かに「幸いなるかな貧しきもの」。批判的な精神も大事です。それらを失うとミッションスクールでもなんでもなくなってしまうです。

○月本 「教育は100年の計」などといえますね。立教大学はどこにまなざしを向け、何を最も大切にしているのか。日本全体にもいえることでしょうか、そういう視座がとくに教育には重要ですね。

○西原 キリスト教的理念にしっかりと立つ教育が必要です。今までのような大国主義では駄目。それをこれまで表現し、考えてきたのは全カリです。学部教育全体がリベラルアーツである。全カリと学部が組み合わせりながら、立教らしいリベラルアーツを生み出していく。これが第3の道ですね。

〈学生の能力を引き出せる環境〉

○千石 池袋図書館の入館者が先日、開館1年足らずで100万人を突破しました。あの図書館ができて、今の学生は本当によく図書館を使っている。本に囲まれたところがたまり場になる。これは非常に喜ばしいことです。単にスペースがあるところにたまっているだけではいけません。読むと読まぬにかかわらず、本があると、本のオーラに影響されるんです。私は図書館長を務めたことがあります、こうした環境が歴代館長の提案で実現したら立教をやめてもいいと思っていました。そして、ちょうど定年でした（笑）。

○西原 図書館のラーニング・コモンズも盛況ですね。予約を取るのが大変なほど人気だそうです。

○千石 学生の歩き方が早くなりましたよね。以前はぶらぶらしていた感じ

があったが、今は、校門に入って行き先がある人の歩き方をしている。いいことですね。

○月本 私は、学生の潜在的能力を十分に引き出せてこなかったのではないかと、申し訳ない思いをもつことがあります。レポートなどから学生の能力の高さを感じさせられることが多々ありましたけれど、それを伸ばしてあげられなかったのではないかと。馬を水辺へ連れていくことはできても、水を飲ませることはできない、といいますが、水を飲ませるのではなく、学生の潜在能力を引き出してあげられる制度や環境が教育には必要ですね。

○千石 また、職員の関与の仕方もいいですね。図書館の「授業内情報検索講習会」の実施とか、大学教育開発・支援センターが発行している『Master of Writing（レポートの書き方）』とか『Master of Presentation（プレゼンテーションの準備のポイント）』も素晴らしい。立教は職員が教育に関わる気風が昔からありますし、それを大事にしています。教職協働ですね。

〈大学教員の忙しさ〉

○西原 学生にとって学びのハード面は大事ですよ。ですから、教員が「文化の香り」を出せばよい。立教にはいい教員が多いのですから、自信を持ってほしいです。

○月本 一般教育部の解体から分属、新学部設立の中で、学生数やコマ数が増えていきました。そのために、教員の負担は昔に比べて増えている。かつてあった時間的な余裕が次第になくなってきたように感じます。社会全体がそうってきている、ともいえましようけれど、研究の時間を確保し、研究者としても質の高い教員が育つことが

大学教育には重要なことです。

○青木 日本では、いや世界的に大学進学は一般的になりました。ですから、大学の貢献はいまや目に見える形で出すことが求められます。それは日本だけではありません。矢内原総長がかつて言った「大学の権威」を、世間は20世紀後半には無条件には認めてくれなくなりました。補助金を獲得するのにも、事前の計画や、成果を見せないといけない。当然、教員が忙しくなる。また、地域社会と付き合えないと生きていけない。それらの按配、大学の力量が問われています。

○西原 先日、キリスト教関係の大学の集まりがあって話を聞きましたが、どこも大変だということでした。教員が高校や予備校を巡ったりして、研究休暇もろくに取れない。教員にはある程度のゆとりが必要で、学生との時間も確保されないと枯渇してしまいます。立教はサバティカル制度が何とか保たれていますが。大学生がキャンパスで教員と触れ合う環境も重要です。

○千石 立教の教員は、既に実績を上げた人を採用していますが、研究者養成の機能はこのままでよいのでしょうか。自前で育てることが大事です。育てて、他大に供給するくらいにならないといけない。次の段階はそこが大事だと思います。

〈終わりに〉

○西原 それでは、最後にそれぞれの先生方から一言いただきたいと思います。

○月本 本校にも、残念ながら、不本意就学者が少なくありません。そうした学生をさらに失望させないような配慮が必要であろうと考えます。それはなによりも学生の関心を喚起させるような授業があるかどうかにかかっている

ます。できる学生を伸ばすのは簡単です。落ちこぼれる学生を掬い上げることは難しい。一般教育部時代の演習はそういう役割を部分的に果たしていたように思います。キリスト教を掲げる本学の重要な課題のひとつはその辺りにあるように思います。

○千石 教養教育に新しく光が当てられているのを確認でき今日は満足です。16年カリに向け、皆さんがんばってください。

○西原 セカンドステージ大学も、若者の学生に混じっているところに効果が生まれます。人生の先輩が横にいる。そのような環境で学ぶことはとても良いことだと思います。

○千石 「異世代共学」ですね。ただの「共学」ではありません。

○西原 セカンドステージ大学の存在を大学として位置づける必要があると考えます。設立から5年が経ち、いまセカンドステージ大学のセカンドステージに入ってきていると思います。

○青木 全カリは1997年にできたときに、いろんな夢を抱えていました。文部科学省の考えてきた形のカチッとした一般教育を変えて、昔から大事にしていたリベラルアーツ教育を、どのようにすれば実現出来るかというようなこと。しかしながら多様な夢には相互に矛盾点も有り、12年の総合カリ、10年の言語カリ改革（必修修了後の科目が充実し、語学力が伸ばせるようになった）では、大分考えていたことが動いたと考えています。

いま、専門科目の中にも語学の科目を増やし、力を入れ始めています。総合の領域別科目はもともと学部の授業に全カリを入れていくという考え方で、諸方面の反対で実現しませんでした。16年の統合カリは専門と全カリが一体になって学ぶことを目指しており、その実現に向けて努力していき

いと思います。

○**月本** 今後、本学のキリスト教教育については、多方面から要請もあると聞きます必修科目化という課題も含め、しかるべき場所で理念的にしっかりと議論して欲しいと思います。

○**西原** 小規模だったカレッジの理念、規模が大きくなっても「文化の香り」がする、社会に対する批判的な視点を養う教育をすること、これが第3の道と考えます。他大学とは違う尖ったところをずっと持っていたいですね。2016年に向け、これらをいかに実現できるか。大きな課題です。本日はありがとうございました。今後も立教にお力添えをいただきたいと思います。